

## 平成 29 年度 「スラブ・ユーラシア地域（旧ソ連・東欧）を中心とした総合的研究」に関わる「共同利用型」の個人による研究 研究報告書

平成 30 年 3 月 13 日現在

研究課題名	ブルガーコフ『犬の心臓』などに見られる医学的「若返り」の文化的意義	
申請者	氏名	所属機関・職
	梅村 博昭	元東京農業大学生物産業学部・講師

研究成果の概要 2017年7月5日～9日、および2018年1月28日～30日の二回の滞在をおこなった。第一回は電子ジャーナルの論文の収集をもくろんでいたが、同時に八月に京大文学部で開かれる「ロシアにおけるSF・SFにおけるロシア」研究会のロシア語報告原稿を書いている最中であり、結果としてはその原稿執筆で滞在が終わってしまった。この原稿は前年、前々年の滞在のテーマであったルスタム・カーツ『ソヴィエト・ファンタステカの歴史』（梅村博昭訳、共和国刊、2017年）を巡るもので、やや「残務整理」に追われるような形で今年度のテーマとかけ離れてしまったのが残念である。ただしその間、当該研究会の主催者である越野剛氏、岩本和久氏、登壇者であるススロフ氏、また研究会でのスカイプインタビューの相手であるロマン・アルビトマン氏（スカイプ経由）と話し合う機会があり、とくにアルビトマン氏とはスカイプでもかなりのことが話してもらえる確証をもつことができたいへん有益であった。おかげで八月の研究会報告は成功であったと思う。二回目まではかなり間が開いたが、その間に当初もくろんでいたブルガーコフ『犬の心臓』とともに、やはり医師でもあり血液交換による人間の若返りを唱えたボグダーノフのほうにも関心が広がってしまい、二代目の滞在はボグダーノフの思想をめぐるロシア語・英語の研究書を閲覧、必要箇所の複写をおこなった。ボグダーノフの『赤い星』にもこの「若返り」思想ははっきり述べられているが、これはブルガーコフ『犬の心臓』に述べられたヨーロッパ的な外科手術による「若返り術」とはいちおう別のものであると言える。しかしそれがまったく無関係といえるのか、今後検討していきたいと思う。

主な発表論文等（雑誌論文、学会発表、図書 等）※謝辞の有無について明記願います。  
いまのところは刊行に至っていません。

当該研究活動を基に応募中の研究プロジェクト（科研費等）

※枠を調整することは構いませんが、ページは追加しないでください。